

「教諭から学びました！」

雪が降ったというだけで、文章にするネタがずいぶん増えます。これから書くことは、昨日のできごとです。校舎の外での「気づき」が昨日。今日は、校舎の中での「気づき」です。朝の会の巡視に行ったときのことです。廊下から一年C組の教室に目をやると、黒板に数枚のプリントが貼ってあるのが目に入りました。

何だろうと思つて教室に入ると、雪について書かれているプリントだとわかりました。それには結晶の分類や、状況の違いによつて変わる雪の呼び方が書かれていました。担任のI教諭が、前日から準備したもののようでした。

私が特に興味をもつたのは、雪の呼び方です。日本という国は、四季がはっきりしており、古（いにしえ）の人々は自然と生活を常に関わらせてきました。したがつて、雨や雪などの自然現象の表現は実に豊富です。I教諭が生徒たちに教えたかったのは、雪という自然現象を通して知ることができる人間の表現の豊かさだったと私は思います。

「淡雪」「粉雪」「牡丹（ぼたん）雪」など、いろいろな呼び方がある雪ですが、彼が生徒たちに投げかけたのは「友待つ雪」でした。これについては私も全く知りませんでした。

「『友待つ雪』なんていう雪があるんやねえ。どういふ雪のことかわかる？これはね、……。」

I教諭のレクチャーが始まりました。

私はそれを聞いて、心を奪われました。そして、その語源が知りたいとすぐさま思いました。彼に教えてもらうこともできるのですが、私は待ちきれず、校長室にもどり語源を調べました。

語源はどうやら和歌のようです。いく



つかの和歌に、この「友待つ雪」という言葉が使われています。その中の一つが、奈良時代の大伴家持が詠んだ「白雪の色わきがたき梅が枝に友待つ雪ぞ消え残りたる」という歌です。

白い梅の枝の上に、梅の花と見分けがつかないように、次に降ってくる仲間を待つて雪が消えずに残っている。これが歌の意味です。消えずに残っている雪を、まるで友を待つているかのようなたとえられた家持の表現の豊かさに、改めて感動しました。言葉の奥に秘められた古の人たちの感覚が、こうやって和歌を通して知ることができることにわくわくしました。

数多くある雪の呼び方から、「友待つ雪」をチョイスして生徒たちに示した体育科のI教諭にも感動しました。さすがに前日から準備するだけのことはあります。勉強になりました！

（十二月十七日 記）